

平成 30 年 6 月 21 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(A)

研究期間：2014～2017

課題番号：26705011

研究課題名(和文)近代学校教育草創期のブータンにおける学校教育及び留学事情の包括的解明

研究課題名(英文)Comprehensive Elucidation of School Education and Study Abroad Circumstances in Bhutan at the Beginning of Modern School Education

研究代表者

平山 雄大(HIRAYAMA, TAKEHIRO)

早稲田大学・平山郁夫記念ボランティアセンター・講師

研究者番号：80710649

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、ブータン教育研究の対象時期から疎外され、まとまった研究成果物が提出されていない近代学校教育草創期＝「少数精鋭のエリート教育」が実施されていた1910～1940年代の約40年間に着目し、当時のブータン国内における学校教育事情、及び隣国インドへの留学事情を明らかにすることである。シッキム政務官が残した記録写真、映像、年次報告書、訪問報告書等の分析やブータン各地及びインドのカリンボン等での調査を通して、季節移動を繰り返す学生の就学形態、就学者数の変遷、留学生の留学先や進路等、また「西欧に留学した初めてのブータン人」と言われる第3代国王妃のイギリス留学を巡る諸相が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to examine situation of school education and study abroad circumstances of Bhutanese students during 1910s to 1940s, a period of “minor elite education” or first stage of modern school education in Bhutan. During the 4 years period, this research has implemented analyzes of photographs, images, annual reports, visit reports etc. left by political officer in Sikkim and surveys conducted in various parts of Bhutan and India. Through these, student enrollment forms of repeating seasonal movements, changes in the number of enrolled students, various aspects of study abroad in the United Kingdom by Ashi Kesang Choeden Wangchuck, who often get called “the first Bhutanese studying abroad in Western Europe”, etc. were revealed.

研究分野：比較・国際教育学

キーワード：教育学 近代学校教育史 季節移動 留学 ブータン

## 1. 研究開始当初の背景

(1) その特色ある地理的状况により、長らく隣国を除いた外部との接触が稀少であったことに加え、1974年に観光旅行者の入国を認めて以降も公定料金制度をはじめとした各種政策によって外国からの影響を制限してきたブータン王国 (Kingdom of Bhutan、以下ブータン) に関する教育研究は、周辺諸国を舞台にしたものに比べて多くはなく、同国の教育研究は未だ萌芽的な領域だと言える。国内外の研究者による研究成果物は主に1990年代前半より提出されはじめたが、それらは、A) 1990年代以降の教育制度や教育内容分析の蓄積はあるが実証研究が乏しい、B) ブータンの地域多様性を示していない、C) 時系列を追いつながら近代学校教育を巡る諸相を描写・分析した研究がなされていない、といった課題を内包している。

(2) 研究代表者はこれまで、三島海雲記念財団学術研究奨励金(2012年度)研究課題:「ブータンの学校教育史に関する基礎的研究 伝統と近代の共存を巡る葛藤を中心に」)、日本科学協会笹川科学研究助成(2013年度)(研究課題:「ブータンにおける近代学校教育制度の導入と受容に関する実証的比較研究」)等の助成を受け、ブータンにおいて「一般に開かれた近代学校教育」が導入され拡充されていく1950年代以降の歴史的変遷を明らかにすることを試みてきた。しかしながら、上記の研究を遂行する過程で、教育研究の基盤形成のためにはそれ以前の時期の教育事情についても一定以上の知識を身につける必要性を痛感した。ゆえに時代を遡り、ブータンにおける近代学校教育草創期と位置づけられる、近代学校教育が導入された「少数精鋭のエリート教育」が実施されていた1910年代から1940年代までの約40年間に焦点を当てた研究を計画した。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究の主目的は、ブータン教育研究の対象時期から疎外され、まとまった研究成果物が提出されていない近代学校教育草創期=「少数精鋭のエリート教育」が実施されていた1910~1940年代の約40年間に着目し、当時のブータン国内における学校教育事情、及び隣国インドへの留学事情を明らかにすることである。

(2) 本研究の具体的な目標・課題は以下の3点である。

- 近代学校教育草創期の政治・社会状況の解明
- 学校教育及び留学事情の実証的解明・比較分析
- 近代学校教育草創期の学校教育事情及び

## び留学事情の解明

### 3. 研究の方法

(1) 近代学校教育草創期の政治・社会状況の解明

ブータンにおける1910~1940年代の政治・社会状況はどのようなものであったのかを、初代国王ウゲン・ワンチュク (Ugyen Wangchuck) が当時の英領インド総督ルーファス・アイザックス (Rufus Issacs) に送った書状、フレデリック・ウィリアムソン (Frederick Williamson) をはじめとした英領インドのシッキム政務官 (political officer) 等当時のブータンを訪れたイギリス人が残した記録写真や映像、年次報告書、訪問報告書、その他英語文献・資料、ゾンカ語文献・資料等の分析を通して明らかにする。

(2) 学校教育及び留学事情の実証的解明・比較分析

どのような人物が選抜され、どのような場所でどのような教育を受けていたのかを、ブータン国内のハ、プムタン、インド国内のカリンポン等を中心に調査を行う。また調査により得られた情報をもとに、各地において行われていた教育の比較分析を行う。

(3) 近代学校教育草創期の学校教育事情及び留学事情の解明

ブータンにおける1910~1940年代の学校教育・留学事情はどのようなものであったのかを、シッキム政務官による年次報告書や訪問報告書の詳細な分析を通して解明する。また、「西欧に留学した初めてのブータン人」と言われる第3代国王妃ケサン・チョデン・ワンチュク (Kesang Choeden Wangchuck、以下アジ・ケサン) のイギリス留学を巡る諸相に関して、ロンドンの英連邦関係省 (Commonwealth Relations Office) やブリティッシュ・カウンシル (British Council)、ニューデリーやカルカッタの高等弁務官事務所 (Office of the High Commissioner for the United Kingdom) がやり取りした書簡、電報等をはじめとした一次資料の分析を通して明らかにする。

### 4. 研究成果

(1) ハの学校: カリンポンへ留学した少年たちは、ウゲン・ドルジ (Ugyen Dorji) に付き従って冬の時期はカリンポン、夏の時期はハと季節移動を繰り返していた。もともとカリンポンのブータン・ハウス (Bhutan House) に拠点を置いていたウゲン・ドルジが夏期にのみハに腰を据えるという形態は息子ソナム・トプゲ・ドルジ (Sonam Tobgye Dorji) や孫のジグメ・パルデン・ドルジ

(Jigme Palden Dorji)にも引き継がれており、ドルジ家の慣習であった。少なくとも最初期は、八の学校は年間を通して開校していたわけではなく、カリンボンへ留学した少年らが帰国している夏期にのみ同地から派遣された教師のもとで学ぶ場として機能していた。ゆえに、カリンボンへ留学した少年たちと八の学校の第1期生は同一人物を指している。

ブムタンの学校：1931年に記された当時のシッキム政務官ワイヤー(J. L. R. Weir)による報告書に明確に記されているが、「ブムタンの学校」という名称が定着している同校も、冬の時期はトンサ、夏の時期はブムタンと季節移動を繰り返していたワンチュク家(王家)に付き従って場所を変える移動式の学校であった。初代国王の後継者である後の第2代国王ジグメ・ワンチュク(Jigme Wangchuck)の教育の場という性格上それは至極当然のことであり、ともに学んでいたのは王家に仕える者たちの子弟、つまり将来彼の側近となる者たちであった。ブータン版ミエザの学校と形容できる同校には、八の学校の第1期生であるタシ(Tashi)がインドで学業を終えた後に教師として着任し、後の第3代国王ジグメ・ドルジ・ワンチュク(Jigme Dorji Wangchuck)や彼の異母弟であるナムゲル・ワンチュク(Namgyel Wangchuck)らの指導にあたった。

(2)八の学校の第1期生である「46人」のブータン人少年のカリンボンでの留学先は、歴史教科書等に記されているスコットランド国教会の神父であるグラハム(J. A. Graham)によって1900年に設立されたドクター・グラハムズ・ホーム(Dr. Graham's Homes)ではなく、同じくスコットランド国教会の神父であり、グラハムが師事していたサザーランド(W. S. Sutherland)らによって1886年に設立されたSUMI(Scottish Universities' Mission Institution)であると本研究は結論づけた。ドクター・グラハムズ・ホーム1947年までの名称はセント・アンドリュース・コロニアル・ホーム(St. Andrew's Colonial Homes)には当時の在学者名簿や雑誌が現存しているが、それらからブータン人留学生が20世紀初頭に同校で学んでいたという事実を確認することはできない。一方で、1910年代半ば~後半(推定)にカリンボンに留学した少年たちを撮影した写真の右端に、当時のSUMIで要職に就いていたプラダン(H. D. Pradhan)が写っていること、1913年から1915年にかけて、ウゲン・ドルジがSUMIの現地スタッフを務めていたこと、1924年にSUMIで撮られた八の学校の第1期生らとSUMI関係者の集合写真が現存していること等を総合的に判断するに、彼らが学んでいたのはドクター・グラハムズ・ホームではなくSUMIであったとするほうが納得がいく。

(3)八の学校とブムタンの学校の就学者数は、1920年代にはシッキム政務官によって頻繁に記録されている。ベル(C. A. Bell)の報告では設立当初の八の学校の就学者数は「46人」、ブムタンの学校の就学者数は「18人」となっていたが、前者はその後微減、後者はその後微増し、1922年の時点で各学校の就学者数は37人、24人と報告されている。この頃になると八の学校の生徒は同校を卒業し、技術学校や工業学校へと進学する者が現れてきている。初代国王の書状によると、1921年の時点で「45人」のうち33人がすでに中等教育スタンダードを修了しており、大学入学資格試験に向けた勉強が続けられていく。1923年5月18日付の年次報告書によると、それまで季節移動とともに継続されてきた八の学校は閉鎖され、以降はソナム・トプゲ・ドルジの監督下でカリンボンに定住しながら教育が続けられることになる。同報告書によると、カリンボンの学校の就学者数は24人、ブムタンの学校は17人と減っており、その翌年の就学者数はそれぞれ20人、17人、さらにその翌年はそれぞれ15人、10人と報告されている。諸事情により学問の道を中断した者もいただろうが、留学生の多くは卒業し大学入学資格試験を受け、デヘラードゥーンやカルカッタ等インド各地にて森林保護官や外科医補佐になる訓練に従事していく(後述)。

1926年5月17日付のベイリー(F. M. Bailey)による年次報告書には、八の学校が再開され新たに17人の少年が入学したことが記されている。同報告書よりカリンボンの学校は「カリンボン高校」と表記され、その就学者数は5人、さらにその翌年は2人のみと報告されている通り、八の学校の第1期生のほとんどが卒業したタイミングで、学校を再開し第2期生を入学させたものと考えられる。翌年の年次報告書によるとブムタンの学校はこの時期閉鎖されていたようであるが、これは1926年に初代国王が崩御し第2代国王が即位したことと密接に関連し、学びの場としての機能を終え第1期生が揃って卒業したためだと考えられる。さらにその翌年の年次報告書には、第2代国王の弟を含めた合計20人の少年がブムタンの学校に在籍していると記載されており、彼らのことをブムタンの学校の第2期生と呼ぶことができよう。

1930年代に入ると、「八とブムタンの学校は1年を通して良い発展を遂げたと言われている」という文章が定形となり、両学校の近況に関する詳細は省略され、留学した者の試験結果やインド各地での訓練状況の報告に重きが置かれるようになる。そのため年次報告書から各学校の変遷を知ることは難しい。また、1940年代に入ると年次報告書から八の学校の記述はなくなり、「ブムタンの学校は良く発展したと言われている」、「ブムタン

の学校は、引き続き申し分なく発展している」等とプムタンの学校に対しての単調な報告が繰り返されている。

(4) 八の学校の第1期生を主としたインドへの留学生に求められたのは、ブータンの近代化を担う知識や技術の獲得であった。1921年に記された初代国王の書状はブータン人少年の学業・訓練等に対する財政援助を依頼するものだが、「現在直面している問題は、ブータンの開発のためにこれらの少年をどのように活用するかである」と、同書状には少なくとも2人の少年を医者にする、2人の少年に獣医カレッジ (Veterinary College) を修了させる、少年数人に科学と教授法を学ばせ、その後6人の少年にブータンで初等教員養成校を運営させ国内各地に設置する学校の管理をさせる、3人の少年に農業・酪農業の科学的・実用的訓練を受けさせる、2人の少年に織りの最新技術を学ばせ、他の者に製革法を学ばせる、4人の少年を森林管理学校 (School of Forestry) で学ばせる、1人の少年に鉱山業の訓練をさせる、2人の少年を土木技師になるための大学に通わせる、2人の少年に印刷所を運営するための訓練を受けさせる、といったその後の人材育成目標が細かく記されており、ブータン (ブータン宮廷) が当時どの分野の人材を欲していたのかを示す貴重な資料となっている。

1920年代に入ると、八の学校の第1期生の中には中等教育を修了し大学入学資格試験を受験する者が現れてくる。ベイリーによる1923年5月18日付の年次報告書にて初めて同試験 (1922年) の受験者が確認され、1923年には4人、1924年には8人が受験した。そして1926年5月17日付の年次報告書には「1915年頃にカリンボンに送られた46人のうち合計11人が合格した」との報告がなされている。

大学入学資格試験の合格者はデヘラードウーンの森林研究学校 (Forest Research Institute and College)、カルカッタ近郊シブプールのベンガル工科カレッジ (Bengal Engineering College)、同じくカルカッタのベンガル獣医カレッジ (Bengal Veterinary College)、キャンベル医学学校 (Campbell Medical School)、バーガルプルの教員養成校 (Training School) といったインド北部・東部に位置する高等教育機関へ進学し、それぞれ森林保護官、鉱山技術者、獣医補佐、外科医補佐、教員になるために学業を続けている。一方で、製革技術者となるためにカンプールの馬具・鞍具工場に派遣された者もいた。また大学入学資格試験に合格していない者も、シロンのグルカ連隊に所属し軍事訓練を受けたり、パラミュでラック養殖の実用訓練を受けたり、カリンボンの病院で調剤師となる訓練を受けたりしている。彼らに先立ち、測量技術を学ぶために1922年後半よりデヘラードウーンのインド測量局測地部門 (途中よ

りシロンのインド測量局東部地区) に派遣された者もいた。

彼らは1920年代後半から1930年代前半にかけてそれぞれの学業・訓練を終え、順次ブータンへと帰国している。例えば、教員養成校で学んでいた2人のブータン人は1928年5月に2年間の課程を修了し、同様にベンガル工科カレッジで学んでいた1人のブータン人は1929年3月に3年間の課程を修了し帰国した。また、キャンベル医学学校で学んでいたパンチュン (Phanchung) は1931年12月に最終試験に合格したが、さらなる技術習得のために滞在を1年間延長し1933年1月に帰国した。

(5) アジ・ケサンのイギリス留学はそれらとは一線を画し、花嫁 (= 次期国王妃) 修業としての性格が強いものであった。研究の結果、アジ・ケサンの留学は、シッキム政務官グールド (B. J. Gould) の推薦によるものであったこと、留学先は、ロンドンのケンジントンに位置するプラムハム・ガーデンに面したハウス・オブ・シティズンシップ (The House of Citizenship) というフィニッシング・スクール (主に良家の未婚女性に、社交界に必要な文化的教養、マナー、プロトコル、料理、家事等を教える学校) であったこと、

ドルジ家は、ブータンが今後大きく変化し外に開かれていくことを予感して彼女を留学させたようであること、兄であるジグメ・パルデン・ドルジが彼女のパスポート取得のために奔走したこと、イギリス到着は1948年9月20日 (おそらく英国海外航空の飛行艇「サンドリンガム号」にて) で、留学期間は約1年であったこと、留学中にヨーロッパ各地を歴訪したこと等が明らかになった。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

平山雄大「近代教育黎明期のブータンにおける学校教育・留学事情に関する基礎的研究 シッキム政務官報告書の分析を中心に」『早稲田大学教育総合研究所』早稲田教育評論』第30巻第1号、169-188頁、2016年3月。(査読有)

平山雄大「ブータンにおける初期近代教育事情の解明 近代教育50年史」京都大学ヒマラヤ研究会、京都大学ブータン友好プログラム、京都大学霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院『ヒマラヤ学誌』第17号、162-173頁、2016年3月。(査読有)

HIRAYAMA, Takehiro “A Study on

the Type of School during the Dawn of Modern Education in Bhutan”, *Quality, Social Justice and Accountability in Education Worldwide*, Bulgarian Comparative Education Society (BCES), BCES Conference Books Vol.13 No.1, pp.67-72, June 2015. (査読有)

[学会発表](計 6 件)

平山雄大「アジ・ケサンのイギリス留学を巡る基礎的文献研究」日本ブータン学会第 2 回大会(於:京都大学) 2018 年 5 月 19 日。

平山雄大「近代学校教育黎明期のブータンにおける教育事情の解明」関東教育学会第 65 回大会(於:早稲田大学) 2017 年 11 月 18 日。

平山雄大「20 世紀前半のブータン人と近代教育 シッキム政務官報告書の分析を中心に」日本ブータン学会第 1 回大会(於:早稲田大学) 2017 年 5 月 21 日。

平山雄大「近代教育黎明期のブータンにおけるインド留学事情の解明」日本比較教育学会第 52 回大会(於:大阪大学) 2016 年 6 月 26 日。

HIRAYAMA, Takehiro “A Study on the Type of School during the Dawn of Modern Education in Bhutan”, 13th Annual International Conference of the Bulgarian Comparative Education Society (BCES), Suite Hotel Sofia, Sofia BULGARIA, 11 June 2015.

平山雄大「「八の学校」の第 1 期生を巡る諸相 ブータン近代学校教育黎明期の生徒の実像」日本南アジア学会第 27 回全国大会(於:大東文化大学) 2014 年 9 月 27 日。

## 6 . 研究組織

### (1) 研究代表者

平山 雄大 (HIRAYAMA, Takehiro)  
早稲田大学・平山郁夫記念ボランティアセンター・講師  
研究者番号: 80710649